

松岡光治（編）

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝
の社会と文化——生誕百五十年記念』

広島：溪水社、2007、8,000 円、xiii+540 頁。

大野龍浩



ジョージ・ギッシング生誕 150 年を記念して編まれた本書は、まさに知の宝庫。ヴィクトリア朝後期の社会と文化が、ギッシングの作品を屋台骨にして、さまざまな角度から明らかにされる。ギッシング論と後期ヴィクトリア朝論の両方の特徴を備えた大著である。序章を含む全 26 章の概要は以下のとおり。

序章：ギッシング小伝（ピエール・クスティヤス、松岡光治訳）

ギッシングには属する二つの世界——貧困に苦しんだ現実世界と現実からの避難所としての古典世界——があると指摘したあと、彼の生涯を年代順に淡々と綴る。人道的なギッシング文学の真価を日本で最初に認識したのは、1920 年代の知識人たちだった事実を、日本の読者に喚起。温和で内気で愛他的な彼は、平和主義者であり、人道主義者であり、時代の良心となった知識人であった、と述べる。

第 1 章：教育——そのタテ前と本音（小池滋）

19 世紀イギリスの教育改革が科学的方法を重視する方向に進んだことを概観したのち、『暁の労働者たち』『流謫の地に生まれて』『因襲にとらわれない人々』『三文文士』において、ギッシングの教育観がどう表れているかを検証。ビルドゥングスロマンにおいては、ギッシングが主人公の精神的成長に肯定的結実を与えていないことを指摘。教育を身につけても立身出世には至らず、精神的亡命に終わるのだ。教育の大衆化により多様化した一般人の興味を引くには、文士は現実感覚を身につけるしかないことと合わせ、ギッシングのメッセージは悲観的。

第 2 章：宗教——なぜ書かなかったのか（富山太佳夫）

犯罪とそれにまつわる人間心理を描くギッシングの貧困小説の主たるモチーフは、

求職者の苦悩と遺産相続である。遺産の内容が、家名、地位、土地などであったそれまでに比べ、ヴィクトリア朝後期では、起業、投機、植民地農場の経営などの成功によって得た金銭に変化したことを、彼は見逃していない。『ネザー・ワールド』を例に引きながら、彼の描く宗教は多方向的で特定の宗教のあり方に収斂しない、と筆者は述べる。これは、多様な素材を取りあげるあまり、作者の意図を一義的に特定しがたい彼の作風と関連している。

第3章：階級——新しい「ミドル・クラス」(新井潤美)

ギッシングは労働者階級を描いて文筆家としての地位を確立してから下層中産階級を描くようになった。いずれの階級の登場人物も、どんなに刻苦勉励しても、属する階級の中で幸福になるのが関の山。上昇する機会を与えられても、結局は自己の属する階級からははみ出し、上の階級にも受け入れられない——その不条理さを、『流謫の地に生まれて』『下宿人』『女王即位50年祭の年に』『私記』を例にとりて説き明かす。

第4章：貧困——貧民とその救済(石塚裕子)

19世紀イギリスにおける貧民救済のための慈善事業に関する歴史を詳述したのち、その社会背景のなかで、ギッシング作品の主人公たちが慈善に対してどう反応したかを読み解く。彼らに共通しているのは、みずから苦勞の多い赤貧の生活を選択することであり、その原因は彼らのプライドである。それは作者の誇り高い性格の反映であると説く。

第5章：都市——自分のいない場所がパラダイス(松岡光治)

都市に幻滅して田舎に住んでも、都会の文化と知的刺激を求めずにいられなかったギッシング。ロンドンの発展を歴史的、社会学的に概観することによって、その実態を明らかにしたあと、彼にとって、帝都は悪徳のはびこる侮蔑の対象であると同時に、精神活動の中心としての憧憬の対象でもあったと結論づける。

第6章：科学——進化に背いて(村山敏勝)

「科学による人類の救済をめざす実証主義」「護教的科学論や宇宙論に組み込まれた進化論」などに見られる、19世紀末の科学と宗教の融和の動きなかで、いずれにも懐疑的だったギッシング像を、当時の思想的背景に関する知識をふんだんに盛り込みながら、明らかにする。

第7章：犯罪——越境する犯罪と暴力(玉井史絵)

まず、世紀末に流布した犯罪学を検証。その後、貧困に基づく下層階級の犯罪、中産階級の暴力性、そして、帝国主義という国家による犯罪を描き、問題提起するギッシングの姿を追う。

第8章：出版——ギッシングと定期刊行物(グレアム・ロー、野々村咲子訳)

三巻本から定期刊行物での連載へ、小説の出版形態が変貌する時代にあつて、ギッシングが新旧両方の出版制度に満足せず、孤軍奮闘した作家であることを、当時の出版事情を詳述しながら、指摘する。

第9章：影響——白鳥は悲しからずや（金山亮太）

ギッシングの作風とディケンズのそれを比較し、孤高をいとわぬカーライルの信念にギッシングが同調したことについて述べ、偉大な芸術家としてのメレディスへの彼の憧憬を考察。その後、ギッシングの教養重視主義への日本人の共感が、彼が日本で読み継がれる要因と説く。

第10章：イングリッシュネス——「南」へのノスタルジアの諸相（石田美穂子）
ギッシングの南イタリアと南イングランドへのあこがれの背景には、古代文明への尊崇とアングロ・サクソン文明への誇りがあり、この両義性が彼のイングランド人としての意識の根幹をなすと説く。

第11章：フェミニズム——ギッシングと「新しい女」の連鎖（太田良子）
メアリ・ウルストンクラフトからジェイン・オースティンを経て、ギッシングに至るまで、女性解放の視点から『マンスフィールド・パーク』『流涕の地に生まれて』『余計者の女たち』などの作品を読み解き、「新しい女」の描かれ方の変遷を綴る。

第12章：セクシュアリティ——「性のアナーキー」の時代に（中田元子）
女性のあり方や性道德に関する価値観が錯綜し始めた「性的無秩序」の時代に、ギッシングの描いた女性像も新旧両タイプだったことを指摘する。

第13章：身体——「退化」としての世紀末身体（武田美保子）
ギッシングの作品をジェンダー理論で解釈する。『三文文士』において、時流に乗る作家と逆らう作家のうち、成功する方が男性的であるとし、『渦』は、女性の身体を「因習的社会規範」と「解放への機運」が衝突する場と捕らえた作品と見る。

第14章：結婚——結婚という矛盾に満ちた関係（木村晶子）
『余計者の女たち』『女王即位50年祭の年に』『イヴの身代金』を、結婚生活の不幸や結婚できない男女の孤独に焦点を当てて読み解き、ギッシングが描くヴィクトリア朝末期の結婚をめぐる問題点——家父長制とフェミニズムとの相克、経済的困窮、男性不足など——を明らかにする。

第15章：女性嫌悪——男たちの戸惑いと抗い（田中孝信）
男女関係について家父長的価値観がフェミニズム的価値観に取って代わろうとする19世紀末。筆者は『余計者の女たち』のバーフットと『渦』のロルフを中心に男性側の反応を吟味したあと、父権制を批判しつつフェミニズムの進出には不安を感じるギッシングの矛盾を明らかにする。

第16章：自己——「書く」自己／「読む」自己（新野緑）

ギッシングの自己の本質を、自己投影の核たる作品に探る。『三文文士』に登場する文士たちにとって、「書くこと」は自己抑圧をもたらすもの。いっぽう、『私記』のライクロフトにとって、「読むこと」は自己充足をもたらすもの。しかし、それは書物の内容を鑑賞することによってではなく、五感を働かせて自己を活性化することによって得られる充足である。この不可解さは、ギッシングの自己充足が、理性と感情、精神と肉体、英知と衝動などの矛盾する要素が未分化のまま共存する状態においてなされることによる。つまり、「書く行為」も「読む行為」も、彼に自己実現をもたらすどころか、自己の空白を認識させるだけなのだ。

第17章：流謫——失われたホームを求めて（小宮彩加）

『流謫の地に生まれて』の主人公の生きざまを手がかりに、ギッシングのエグザイル意識（疎外感）の根源を探る。それは、富裕階級にも労働者階級にも属せない不安定さ、古典に対する身分不相応の偏愛、生涯下宿住まいを余儀なくされる者の自宅への憧憬、にあるとする。テキストに挿入された、ギッシングが住んだロンドン市内の下宿の数葉の写真が、論旨を助ける。

第18章：紀行——エグザイルの帰郷（バウア・ポストマス、光沢隆訳）

ギッシングのイタリア訪問は、古典文学にあこがれた彼の古典の国への「帰郷」にすぎない。その経験が彼の人生と文学に与えた意味を、筆者は、伝記的事実を掘り起こし、紀行文『イオニア海のほとり』を引用しながら、つまびらかにする。

第19章：小説技法——語りの方法と人物造型（廣野由美子）

初期、中期、後期の代表作である『ネザー・ワールド』『余計者の女たち』『渦』について、用いられた小説技法を明らかにすることによって、ギッシングの方法を体系的にあとづけたあと、彼は、社会のために書くという伝統的規則のなかで、自分のために書くという革新性を内包した作家であると結論づける。

第20章：自伝的要素——分裂する書く自分と書かれる自分（宮丸裕二）

自伝と自伝的執筆の定義づけをしたあと、第3節で、『三文文士』と『私記』について、ギッシングの自伝的要素を抽出。世紀末を、読者の教養のための小説から、作者の自己省察のための小説へと転換する時代と位置づけ、ギッシングはその新傾向の黎明期にいと述べる。

第21章：リアリズム——自然主義であることの不自然さ（梶山秀雄）

ギッシングの写実主義が時代を経るにつれどう変容したかを、『三文文士』『私記』、そして短編を分析対象にして、詳述。ギッシングの作風は、労働者の実情を活写する社会主義リアリズムから、適者生存の原理にのっとった自然主義リアリズム

に。さらに、文学の大衆化がもたらすその限界を知ったあとは、自己の内省に視点を向ける諦念のリアリズムへと変化する。

第22章:ヒューマニズム——時代からの亡命(ジェイコブ・コールグ、矢次綾訳)
ギッシング文学の総体的特徴を、作家の人生、作品、同時代の作家との比較をとおして、明らかにする。「ギッシングの小説における都市は、ハーディの自然に相当する。いずれも人間に対して冷淡か、敵対する力を具現している」や、「ギッシングのリアリズムはゾラの自然主義リアリズムと違う」、そして「小説作法上、ギッシングが影響を受けたのはディケンズではなく、ジョージ・エリオット」などの示唆に富む指摘が、随所にある。

第23章:審美主義——美を通じた理想の追求(吉田朱美)
当時の芸術思潮についての豊富な知識を織り交ぜながら、ギッシングの初期、中期作品における唯美主義と道徳主義の相克を論じる。彼の共感の対象は、「人生のための芸術」から「芸術のための芸術」へと変化することを指摘したあと、「美的感覚の養成が道徳性の向上につながる」というヴィクトリア朝後期の新しい価値観を、ギッシングの登場人物が具現していることを例証する。

第24章:古典主義——ある古典主義者の肖像(並木幸充)
ギッシングの古典主義には2種類ある。功利・実利主義的現実から避難する手段としての古典主義と、非人間的現実に必要な精神的支柱としてのそれである。前者から後者への変遷が彼の作品群には見られると筆者は考え、後者の思想がローマを舞台にした彼の歴史小説『ヴェラニルダ』に表れていると説く。つまり、物語の背後に描かれた6世紀中葉の時代精神こそ、精神性を失いつつあったヴィクトリア朝社会が回復すべきものなのだ。

第25章:平和主義——その気質の歴史的考察(ピエール・クスティヤス、田村真奈美訳)
ギッシングの平和主義者としての側面を、伝記資料と作品を広く渉猟して明らかにする。平和主義者であった父の影響、自身の穏やかで優しい性質、彼の反帝国主義、不可知論に端を発する死刑批判などについて紹介したあと、「トラウマとなった若き日の過ちと、その後の苦渋に満ちた人生の意味は、彼に厳格な良心と慈愛を与えたこと」と結ぶ。

巻末には、ギッシングの生涯に政治、社会、思想を対応させた年表(武井暁子)を付す。アプローチの違う各論に、「古典への憧憬」(2、319、338、408、452)、「自然主義リアリズム」(102、188、369、400、415)、「不可知論者」(11、416、468)、「新旧の価値観の過渡期に生きた作家」(163、236、253、270、285、362)、

「エグザイル意識」(326、330)、「自分のために書いた作家」(362、380)、「自己省察、内省」(380、401)などの共通した言説が表れるのは、ギッシングの特性を浮かび上がらせているようでおもしろい。そうそうたる執筆陣による本書が、編者の前著(『ギッシングの世界——全体像の解明を目指して(没後100年記念)』(英宝社、2003))とあわせて、ギッシング研究とヴィクトリア朝文化研究に貴重な一石を投じていることは、まちがいない。

(熊本大学教授)